

「二者択一」の論理に抗する

——目取真俊「水滴」論——

大 原 祐 治

はじめに

やはり、戦後六十一年が経ち、生活の中で戦争の記憶が否が応でも消えていつて。そういう状況で、沖繩戦の事実を積極的に知ろうという誠実さや謙虚さなくして、最初から自分がこうあつて欲しいという意図を全面に出して、日本軍の名誉回復をはかるといふ動きが強まっています。

「…」

今、沖繩戦や沖繩の近現代の歴史を学ぶというのは、目の前で起こっている政治状況と密接に結びついた記憶の関いなんだなと感じています。^{注2}

沖繩を拠点に問題提起的なテキストを発表し続ける作家・目取真俊の、ある対談における発言である。対談の相手は、その著書「母の遺したもの―沖繩・座間味島「集団自決」の新しい証言」^{注2}が、座間味島・渡嘉敷島の「集団自決」に関する訴訟に

おいて、本来の論旨とはズレた形で参照されることになってしまった沖繩の女性史家・宮城晴美である。

座間味島・渡嘉敷島での「集団自決」をめぐる訴訟とは、「集団自決」が戦隊長命令だったとされることは〈事実〉と異なっているにもかかわらず、本の中でそのように記述されたことは「名誉毀損」にあたるという主張に基づき、当時の戦隊長およびその遺族が、『沖繩ノート』（一九七〇・九、岩波書店）を著した大江健三郎と、その版元である岩波書店とを提訴した、というものである。^{注3}

岡本厚も指摘しているように、^{注4}対象となった本は初版の刊行からすでに長い年月が経過したものであり、それを今になって提訴することの背景に、単なる個人の「名誉」の回復にとどまらない現在の欲望、すなわち「沖繩戦観を書き換えたい」という「政治キャンペーン」を読みとめることは容易である。しかし、問題はこうした個人の〈責任〉や〈名誉〉（だけ）が問題となる時、何が見失われてしまうのか、ということにある。

この点について、宮城は目取真との対談の中で、議論が「誰の命令だったか」というレベルにとどまってしまうならば、隊長命令がなかったとされれば隊長が免責されるだけだし、命令があったとなれば逆に国家および軍の責任が不問に付されるわけではないのか、と危惧していた。そして目取真もまた、この宮城の危惧を共有しつつ、次のように発言している。

今の状況を簡単に言いますと、「集団自決」に追い込まれていくような状況と似て、選択肢が狭められて二者択一になっていくわけです。捕虜となって殺されるか、「自決」するか、というように。「…」今回の裁判でも、名譽回復するか、さもなければ汚辱に染まるかとかですね。でもそうではないんです。戦争でも政治でも、実際にははるかに灰色の部分が多いのですから。ところが今は安倍晋三首相なんかもそうですね、北朝鮮が攻撃するかもしれない、と脅威を煽って、何もしないでやられるか、軍備を強化して対抗するか、という狭い選択肢を用意し、国民を追い込んでいくわけですよ。「…」ウチナーグチ（沖縄語）を否定した教師の論理も、非常に単純化された二者択一ですよ、共通語か沖縄語かという。両方使えるようになればいいだけの話なんですよ。

本稿では以下、このような「二者択一」の論理に抗するテクニクとして、目取真の小説「水滴」を論じていきたい。その理

由は端的に言って、この小説の中に見られる次のような一節がある。

「…」以後、宮城セツの消息はつかめないまま、徳正は島の最南端の摩文仁海岸に追い詰められていった。実は、セツたちも一日前にほとんど同じ道を通って摩文仁海岸に着いていた。そして、徳正が爆風を受けて気を失い、漂っていた波打ち際から二百メートルも離れていない岩場で、同僚の女子学生五人と手榴弾で自決を遂げていたのだった。

親戚や客が帰った後、徳正は独り浜に降りた。水筒と靴パンを渡し、自分の肩に手を置いたセツの顔が浮かんだ。悲しみとそれ以上の怒りが湧いてきて、セツを死に追いやった連中を打ち殺したかった。（傍点引用者、以下同様）

この小説を論じるにあたって、これまであまり大きく注目されてはこなかった部分だが、主人公・徳正と同郷だという女子生徒隊の宮城セツが、徳正たちとの再会を約束しながらも「自決」を遂げていたのだということを、徳正が戦後、だいぶ時間が経過してから知る、というくだりである。

問題は、その際の徳正の感情がいかなるものであったのか、という点にある。徳正の言う「セツを死に追いやった連中」とは、一体誰なのか。それは、沖縄に激しい攻撃を加えていた米軍なのか、それとも、セツのような少女までをも戦場に駆り出

して無謀な戦いを継続していた日本軍なのか。このときの徳正には、そのような「二者択一」の論理は存在しない。それはただ単に、「連中」と記されるのみである。おそらく、徳正にとつてはそのようにしか語り得ないのだ。しかも、後で詳しく論じるように、このセツに関する記憶は、その後、長らく記憶の奥底に沈められ、想起されることもない。

一見、この小説の核心は、主人公・徳正が、かつて戦場において瀕死の友人・石嶺を置き去りにして逃げた〈罪〉を、亡霊となつて現れた石嶺当人から赦されたのか否か、という「二者択一」的な物語にあるように読み取ることができる。しかし、このメインプロットと切り離しがたく結びついているはずの、この宮城セツに関する記憶は、徳正の中でどのように存在しているのか。本稿の射程は、このような問題にある。

1

「水滴」という小説には、主人公である徳正の他にも、何人かの主要な人物が登場し、その人物たちの組み合わせによつて、いくつかの物語が交錯する。具体的には、徳正の妻・ウシや、徳正の従兄弟である清裕、そして、戦場の記憶の中に現れる同郷の友人・石嶺や、同じく同郷の女子学徒隊員・宮城セツらであり、さらには徳正らが暮らす村の人々や、記憶の中の日本兵たちが、これに加わる。そして、徳正／ウシ、ウシ／村人たち、徳正／清裕、ウシ／清裕、徳正／石嶺、徳正／日本兵たち、徳正／セツ、徳正／村人たち、というように、さまざまな

組み合わせを錯綜させつつ、物語は単純な二項対立的図式による理解を拒むように複雑化しながら進行していく。

これはもちろん、単純に登場人物が増え、幾重にも物語が積み重なる、ということだけを意味しない。むしろ、個々の対偶において、いかにして「二者択一」的な二項対立の図式が不発になるのか、ということこそ、確認すべきだろう。

まず最初に提示されるのは、徳正とウシという対偶を核にした物語である。

徳正の妻であるウシは、遊び人になり果てている徳正とは対照的に、真面目に働く「気が強い」が「人情持ち」の人物として描かれている。徳正より「二つ上」とされる彼女にもまた、戦争体験は深く刻み込まれているはずだが、その過去についてテキスト内で言及されることはない。戦後、徳正と出会った時期に「魚商いさなうり」をしていたということが記される以外、彼女自身の過去についての言及はないのだ。

もつとも、鉄血勤皇隊に駆り出されていたという徳正と、自ずとその戦争体験の内実が異なるということは、確かだろう。

「老人会の戦跡地巡り」のバスツアーに参加しているということが記されていることからわかるように、ウシにとつての戦争の記憶とは、徳正のように、個人の内奥に秘せられるというようなものではないらしい。

さらに、このようなウシという人物の造形を考える際に興味深いのは、徳正の足が膨れあがつて寝込んでしまうという異常事態に際しての反応である。徳正の足に起こった出来事を珍し

がり、勝手な「噂」を立てて大騒ぎを繰り広げる村人たちに対し、鉦を振り回して怒るウシ、というくだりだけを見ると、一見、そこに「ウシ／村人たち」という対立があるかのようにも見えるのだが、その実情は異なっている。むしろ、村人たちは「仕事もせん遊び人」と罵ってばかりいても、ウシがどれだけ徳正を頼りにしているか知っている」ので、ウシが本気で怒り始めれば、「一散に逃げ出」す、というようなコミュニケーションの回路が、しっかりと書き込まれているのである。

「ウシ／村人たち」という対立が必ずしも成立しないことは、徳正の膨れあがった足を見たウシが、幼少期に自分の村にいた「一輪車おじ」を想起するというくだりにも明らかであろう。「一輪車おじ」はフィラリアによって睾丸が極度に肥大していたという人物だが、すでにフィラリアが根絶されて久しい現代の沖繩において、徳正がこの病気に罹患するはずはない。そうであるにもかかわらず、ウシは足の膨れあがった徳正を前にして、この「一輪車おじ」を想起し、「懐かしさに目が潤んだ」というのだから、ウシが村々共同体を向こうに回して孤独な状況にある人物である、などといったこともありえない。そもそもウシは、自ら言うように「祖先の供養も欠かしたことのない」人物なのであり、先に確認したように、「老人会」の「戦跡地巡り」のような行事にも参加している、村々共同体に包含されて生きる人物なのである。

また、徳正の足について村人たちが勝手な「噂」を立てて騒ぐことを疎ましく感じていたウシが、一方であてにしているの

もまた、「ゲートボール仲間」から聞く「噂」——すなわち、「ダイカクピョーイン」は危険だが、村の診療所の医師・大城なら信用できる、ということば——であるということも、ウシという人間のあり方を裏付けるものだろう。「近代」な「西洋医学」は信用しない、ということなら、両者を拒むことになりそうだが、ウシの判断は、そのようなものではない。さらに彼女は、事態が改善しないと見るや、今度は「村の年嵩の老女たち」の勧める民間療法を試し、「ユタ」にまですぐたりしているにもかかわらず、効き目がないと見るや、そんなものにはすがった自分を情けなく思い始める、とも言うのだから、ウシという人物を考える際、「近代／伝統」といった二項対立の図式は、まったく機能しない。

一方、かくも村々共同体の内側にいるウシに比べ、「遊び人」とも称される徳正は、村々共同体にとってアウトサイダーなのかといえ、そのようには言い難い。というのも、鉄血勤皇隊にも参加した徳正は、元来、「村から二人だけ首里の師範学校に進」んだ、いわばエリートであるからだ。実際、テクストの細部に目を向けてみても、例えば、膨れた足から滴る水を兵隊の亡霊たちに吸われ、「恐ろしさどくすぐつたさ」という二重の感覚（これ自体、恐怖／快樂という二項対立が溶解している状態であろう）にじっと耐えるほかない状態に置かれた際に徳正が試みたのは、「おかしくなりそな頭を正常に保とうと村の豊年祭の歌詞を誦じ」ることだ^{注6}。こうした細部から浮かび上がるのは、徳正という人物が決して村々共同体から切斷さ

れた人物というわけではなく、むしろその逆である、という事実である。

しかし、徳正にとつての〈戦後〉が、こうした村Ⅱ共同体からの離脱を志向するものだったこともまた事実である。「首里の師範学校」に入ったにもかかわらず、その後の徳正は、村の教員になったりはしていない。早朝と夜に畑仕事をしつづ、十八歳という年齢を偽って「隣町にできた米軍港の荷揚げ作業に出」たのを皮切りに、その後も「何度か村を出て基地建設で賑わっていた中部で日雇い労務をしたり、那覇で塗装業をやつてみたりしたが長続きしなかつた」という。もつとも、多くの家族を戦争で失つたにせよ、徳正には戦後しばらく生き延びた祖母がいたために、村を完全に離れることもできなかつたわけだが、だからこそ、徳正という人物と村Ⅱ共同体との関わりは、ここにはつきりと見て取ることができ。つまり彼は、長らく村Ⅱ共同体の〈内／外〉のいずれにも落ち着くことのできない状態にあつたのだ。ウシとの結婚は、そのような不安定な境遇を脱却する契機になるかとも見えたが、それもわずかな時間で崩れてしまう（その理由は、先に触れた宮城セツの最期を知つてしまったことにあるのだが、この点については後で触れる）。

このような細部にもまた、二項対立的図式からこぼれ落ちるものを提示する、このテキストの特性を見ることができらう。

Ⅱ

ここまで確認してきた主人公・徳正とその妻・ウシに加え、第三の人物として登場するのが、徳正の従兄弟・清裕である。膨れあがつた徳正の足から滴る水に若返り（育毛・強精・美肌）の効果があると気づいた清裕が、これを「奇跡の水」と称してひと儲けしようとし、最後にはその効能が切れて購買者から袋叩きにされるといふ、勧善懲悪的でわかりやすいプロットは、とりわけこの小説が芥川賞を受賞した際の選評^{註7}などにおいて苦言を呈された部分でもある。

だが、このプロットだけを切断して論じることには大した意味はない。むしろここでは、芥川賞発表に先立って提示されていた仲程昌徳の評を参照しておこう。仲程によれば、この小説は徳正と清裕という「二つの焦点」を持った「楕円形の構造」になつており、この二つの焦点は「水」でつながっているのだという。さらに、新城郁夫はこの仲程の論を発展させ、徳正と清裕はともに「ある〈語れないこと〉を抱えこんでいる」ために、村Ⅱ共同体にとつての「他者」^{註9}の位置にあるという「相同性」を持つのだと指摘している。

わかりやすく言葉を補えば、概ね次のようになるだろう。すなわち、徳正は「戦場を体験した者たち」という共同性の中にあるはずだが、その経験の核心部分は、（老人会の面々と観光バスで「戦跡地巡り」をするウシなどとは異なり）共同体内の他の誰かと共有することのできないような、個別的で特異な内

容、言語化できない秘密として、徳正個人の中に抱えこまれて
いる。一方、清裕は、沖繩土着の「水」信仰（注10）ともいふべき共同
性を母体としながら金儲けをするが、その「水」の由来につい
ては、共同体の成員には語ることができない秘密を抱えこんで
いる。両者はともに、共同体の中に存在しつつ、その共同体の
中では語り得ぬ秘密を抱え持っている、というわけだ。

さらに付け加えれば、両者の相同性は、プロットのレヴェル
においても見られる。

徳正は、語り得ぬ戦場体験の周辺にある言語化可能な部分に
ついて、求めに応じて六月二十三日（沖繩戦没者慰霊の日）前
後に「近隣の小・中学校や高校」で行う「講演」を引き受けて
いた。それまで「戦争中のことは忘れようと努めてきた」とい
う徳正が、なぜこのような「講演」を継続的に引き受けてきた
のか。その理由の一つが、「謝礼金」だったとされている。

「嘘物言（注11）いして戦場の哀れ事語（注12）てい銭儲けしよって、いまに
罰被（注13）るよ」というウシの批判が物語るように、これは自らの
〈過去〉の商品化ともいふべきものである。自らの過去（ただ
し、不慣れな「共通語」でも語ることができるような、当たり
障りのない部分に限られる）に向かって時間を遡行させること
によって、利潤が生まれるのだ。しかし、今年の「六月の半
ば」に限っては、突然足が膨れあがり、身動きもできず言葉を
発することもできなくなってしまう、というのが、この小説
の冒頭部分であった。

一方、この徳正の膨れあがった足から滴る水を利用して清裕

が展開していた「奇跡の水」の商売もまた、強精・育毛・美肌
という効能、すなわち〈若返り〉という時間の遡行が利潤を生
むという点において、徳正の物語と相同的である。そして、こ
の効能は長続きせず、最後は購買者たちによって袋叩きにされ
てしまうというのが、清裕に関する物語のオチであった。

田口律男は、徳正と清裕が「同じ歳で、従兄弟同士」である
という設定について、二人が「じつは盾の両面に過ぎ」ないこ
とを意味し、徳正の「贖罪」が、清裕の商売のような「猥雑な
欲望」と地続きであるとした上で、だからこそ、この小説は
「癒し」などと全く無縁であると指摘しているが、これはま
ったくそのとおりだと言えよう。（注11）

ただし、田口がこの二人にウシを対置し、水滴を口に含んで
も何も起こらなかった彼女だけがロマン主義的な意味の病
から逃れており、「徹底した生活者」「リアリスト」たり得て
いる、と評していることには留保が必要だろう。というのも、
すでに見てきたように、ウシは「リアリスト」どころか、民間
療法にでも「ユタ」にでもすがってしまふ一面を持ち合わせて
いたはずであるし、膨れあがった徳正の足を、いまや根絶され
たはずのフィリアに重ね合わせ、幼少期の村の記憶を懐かし
むような心性の持ち主でもあったはずなのだ。ウシを「リアリ
スト」と定位してしまうことは、この小説を「二者択一」の論
理に落とし込むことになってしまうが、この小説全体の構造
が、一見そのようなわかりやすい「二者択一」をちらつかせな
がら、むしろそれを徹底して拒んでいる、ということを読み取

ることにこそ、本稿の主眼はある。

III

清裕に関する物語が、しばしば、シリアスな物語内容に似つかわしくないスラップスティックとして批判され、徳正と清裕という対偶がこの小説に描き込まれることの必然性が疑問視されるのは対照的に、徳正と石嶺という対偶が、この小説のメインプロットを構成する核心的な対偶であることは、なかば自明のことのように思われる。

かつて、瀕死の友人・石嶺を壕の中に置き去りにした徳正の足が膨れあがり、身動きの取れない彼のもとに石嶺の幽霊が出現する。二人の間に対話が成立し、徳正は自らの過去の〈罪〉と向き合い、石嶺がそれを赦すことで、徳正の足が元どおりになるといふ、和解と救済の物語——たしかに、このようにまとめれば、物語は非常にシンプルである。田口律男が指摘するように、性的な快感さえ伴ってしまうこの二人の関係性には、「ホモソーシャルな軍隊内部の男性原理的なエロスの癒合による癒し」さえ感じられよう。

しかし、テクストをつぶさに追うならば、そのようなカタルシスを阻む、いくつものノイズが介入していることに気づかされるはずだ。

まず目につくのは、これまでも少なからぬ論者によって指摘されてきた^{注13}、徳正と石嶺の発話する言葉のズレである。「イシミネよ、赦してとらせ……」という徳正のウチナーグチによ

る呼びかけに対する石嶺の返答が、「ありがとう。やつと渴きがとれたよ」という「きれいな標準語」でなされたことは、宮沢剛が言うように、ウチナーグチを使う者は「スパイ」とみなされる「戦中」の時間を、石嶺がいまだに生きていることを示すし、だからこそ「生者と死者の断絶は埋められることはなかった」(宮沢)と言えよう。そもそも、「赦してとらせ」(赦してくれ)という呼びかけに応えた石嶺の言葉は、「赦す」でも「赦さない」でもなく、「ありがとう」というものだった。この返答は、内容からいってもちぐはぐであり、ここに和解や赦しを読みとることは難しいはずである。〈赦す／赦さない〉という、二者択一の問いははぐらかされてしまい、徳正の呼びかけは宙に浮いてしまう。

このとき、徳正／石嶺という対偶の目の前には、〈見捨てた者／見捨てられた者〉、〈生き延びた者／死んだ者〉、〈償う者／赦す者〉、といった二項対立の図式では処理しきれない領域が広がっている。もし、ここで徳正に和解や癒しが訪れたとしてしまふならば、それは田口律男が言うように、「徳正による徳正のための独善的な自己救済」でしかない。

無論、こうした「断絶が埋められないにもかかわらず、異なった言葉を投げ掛け合ったのだと言うべきだろうか」(宮沢前掲論文、傍点引用者)というように、このときの二人のやりとりをパフォーマティヴに受けとめることも可能だろう。実際、トラウマを抱えながら生き続けていく生存者の生にとつて、これは必要なプロセスでもある。しかし、この部分だけを過剰

に前景化することは、逆にテキストの中の何かを隠蔽することになりはしないか。この点についても、田口が提示する指摘は示唆的である。もし、ここに単純な和解や癒しを読みとるならば、「セツを含む「手榴弾で自決を遂げ」た「同僚の女子学生」や、テキストからは排除されている無数の日本兵以外の亡霊たちは、この癒しの水滴にありつくことはできないのだろうか」(傍点原文)、と。

とはいえ、田口はここで、何が排除されたのかということを目指すのみで、それがどのように排除されたのか、ということまで追求してはいない。しかし、言うまでもなく、ここで必要なのは、その排除の実相について確認することである。以下、本稿では、議論を明確にするため、セツに関する問題に話を限定しつつ、この問題について考察しておきたい。

徳正にとって、戦場で失った大切な友人・知人の一人として、セツは石嶺と並んで強く記憶される存在だったはずである。しかし、自分がいま置き去りにすれば死は免れないと思いつつ、その姿を目に焼き付け、置き去りにしてきた石嶺についての記憶とは対照的に、セツについての記憶は、「必ず後を追ってきて」という再会の約束をして去っていった姿としてのみ残っており、しかもその最期については、戦後一〇年以上も経ってから、村の老女たちの会話から偶然知ることになる。

では、「石嶺のこともセツのことも記憶の底に封じ込めて生きてきた」徳正がこの二人の記憶を思い出すプロセスは、いかなるものであったか。

足が膨れあがって動けない自分のもとに、重傷を負った日本兵の幽霊たちが次々と立ち現れる光景を目にした徳正は、当初、「顔に見覚えがあるような気がしたが、思い出せない」という状態であり、その話し声から多くの者は「本土の兵隊」であると理解しつつも、ただぼんやり眺めているだけだった。しかし、その兵隊たちの顔の中に石嶺の顔を認めるとき、徳正は、この兵隊たちのいる光景が、確かに自分がよく知っている光景だと認めないわけにはいかなくなる。「とつくに気づいていながら認めまいとしてきたことが、はっきりとした形を取って意識に上ってくる」とあるように、このとき徳正は、ずっと忌避してきた戦場の記憶の核心部分に向き合うことを余儀なくされている。ただし、このときにはまだ、石嶺に関する記憶は「[...]石嶺が艦砲射撃によって腹部に被弾した夜、島尻の自然壕で別れたのだ」と認識されるのみである。

しかし、その後も兵隊たちの幽霊は現れ続け、石嶺も再度姿を見せるに至って、徳正は全てを生々しく想起することになる。もはや石嶺の負傷は「腹部に被弾した」といったニュートラルな表現にとどまらず、「呻きながら腹を押さえている石嶺の掌から、豚や山羊を解体する時に目にした物と同じ物がはみだしている」といった生々しさへと変わる。つまり、徳正は幽霊となって現れた石嶺の姿をきっかけに、「記憶の底に封じ込めてきた戦場の記憶を、次第に鮮明に甦らせることになるのだ。

一方、セツに関する記憶は、兵隊たちの幽霊が出現し始めた頃には、少しも想起されていない。それが想起されるのは、瀕

死の石嶺の姿が生々しく想起されるに至ってからである。しかも、セツの姿は石嶺たちのように幽霊となって出現していたわけではない。それはあくまで、石嶺に関する記憶が想起される際、その記憶Ⅱ物語の中の一人の登場人物として想起されるにすぎない。つまり、セツの記憶は、幽霊としての姿さえ与えられてはいないのだ。

Ⅳ

川村湊は、戦争体験の「記憶」が「記録」として永久保存されようとも、その「記録」が「先祖返りをするように」「伝承（都市伝承）」や「伝説（現代民話）」となり、さらに「怪談」や「幽霊話」になりはてる」という現代の沖繩の様相を描き取り、そのような文脈に「水滴」という小説を置く理解を示したが、その結論は、徳正によって石嶺の「幽霊」が「成仏」させられたように、現代を生きる者は「戦争の体験や記憶に代わりうる、そうした「幽霊」たちの存在を生き生きと思ひ浮かべる想像力を持つこと」が必要である、というものだった。この理解は、「水滴」という小説を徳正／石嶺という対偶（のみ）を中心に置いて理解する限り、妥当かもしれない。しかし、それでは幽霊としての姿さえ与えられないセツの記憶は、それを記憶する者の死とともに、ただ忘却されるだけなのか。この小説におけるセツという存在は、戦場の記憶の表象不可能性という問題に直結している。「戦場の具体的体験を語ることは、「空白」をいかに埋めるのかという作業ではないのだ。語れば語る

ほど、その言説により構成された意味が崩壊し出す点こそが、「空白」の領域なのである。「…」言いかえれば、それは無前提的に語れない領域として存在しているのではなく、語るという実践においてはじめて措定されていくのである」という富山一郎の言葉を借りるならば、徳正にとってセツに関する記憶は、幽霊となって現出した石嶺を前にして想起し始めた戦場の記憶の中で、まさしく「空白」として措定されている。

すでに確認したように、セツの最期は摩文仁海岸の岩場で「同僚の女子学生五人と手榴弾で自決を遂げていた」というものだった。そして徳正は、そのすぐ側にいたにもかかわらず、気を失って倒れていたために、セツの最期については何ひとつ知らないままだった。徳正がことの真相を知るのは、戦後一〇年以上も経ってからである。この間、徳正がセツのことについて何を考えたのか。この点も、テキストにおいては空白である。

一方、石嶺についての記憶はどうか。その最期（の直前）を見届けて逃げ去ってきた後、捕虜収容所を経て村に戻り、石嶺の母の来訪を受けた際、「身内のことのように無事を喜んでくれる」その母親に対し、徳正は、「逃げる途中ではぐれて、その後のことは知らない」と「嘘」をついたという。しかし、この言い方は必ずしも「嘘」ではないだろう。「逃げる途中ではぐれる」と「見捨てる」とことは、この場合、必ずしも大きな差違ではないだろうから。それよりもここで重要なのは、徳正は石嶺についてはその最期（の直前）の様相をしっかりと見つけ、記憶に刻んだ上で、自分としては「嘘」だと感じるよ

うな遠回しな表現ではあれ、その記憶を石嶺の母という第三者に語り伝えているということだ。だからこそ、その後の徳正は「数年間、毎日の生活に追われることで、石嶺の記憶を消し去ろうと努め」なければならなかったのである。石嶺が瀕死の重傷の姿で幽霊としてその姿を現すことは、逆に言えば、そのような表象として、「石嶺の記憶」が徳正の心の奥底にしっかりと刻まれていたことを物語る。このことは、村の老女たちの会話から偶然聞き取るまで、セツの最期について何も知らず、おそらくは思い出しもしなかったであろうということとは対照的である。

そして、本稿「はじめに」で触れたように、このセツの最期を知ったとき、徳正は彼女を「死に追いやった連中」への怒りにうち震える。

その「連中」とは誰を指すのか。誰が彼女を死に追いやった〈敵〉なのか——米軍なのか、日本軍なのか、「自決」の思想を植え込んだ教育者なのか、それとも、すぐそばにいなながら、気づきもしなかった自分自身なのか。誰が味方で誰が敵なのか、誰が善で誰が悪なのか、セツの死について、この時の徳正は、〈敵／味方〉というわかりやすい二者択一の言葉で説明することができないまま、怒りの矛先を漠然とした「連中」に向けるしかない。しかも、同時に彼の心は、「これで石嶺のことを知る者はいない、という安堵の気持ち」に浸されてしまい、セツを思つてこみ上げてきたはずの「怒り」さえ、溶解してしまふ。

こうして、セツに関する空白は、石嶺に関する記憶をも包み込み、徳正の心に忘却の穴を穿った（それ以来、石嶺のこともセツのことも記憶の底に封じ込めて生きてきたはずだった）。だから、石嶺が幽霊として立ち現れ、徳正の記憶の封印をこじ開け、過去を生々しく想起させたとしてもなお、セツに関する記憶は、徳正の中で空白の穴として残り続けてしまふのだ。

だから、この小説が提示しているのは、決して、友人を見捨てた罪障感に悩まされてきた徳正が赦され癒される物語などではない。鈴木智之が指摘していたように、徳正の抱えこんだ物語は「彼の帰属する「村」共同体」の他の人々には共有されない、きわめて孤立した物語」なのである。重要なのは、想起された記憶の中で、あるいは幽霊との対話の中で、徳正が赦されたか否かという二者択一ではない。そうではなく、この想起のプロセスを通して、その向こう側に幽霊にもならない／なれない、〈語り得ぬ何か〉としてあるセツのような存在と、徳正が向き合う瞬間が提示されているところにこそ、この小説の核心は存する。

「ある構造に回収され得ない構造をこそ描き出している」^{注20}小説、「表象不可能であるが故に、その記憶の穴にこだわり続ける倫理的姿勢を示している小説」^{註21}、「すでに語られている記憶の傍らに、まだ語られていない記憶が横たわっているという事実」を示す小説^{註22}——「水滴」に対して寄せられてきたこのような評言は、なるほどこの小説の核心に触れようとしているが、漠然とした物言いになってしまつてもいる。もし、この小説の

ラディカルさを指摘するのであれば、それはなによりも、宮城セツという存在（の痕跡）＝空白が、テクストの中に織り込まれている点にこそ、注意を向けるべきなのではないだろうか。

おわりに

本稿冒頭で参照した宮城晴美との対談において目取真は、「集団自決」に関する訴訟の動きの中では、「戦後を生き延びた島の人々」という〈当事者〉の「気持ち」を考える姿勢が欠落しており、「個人の名替回復」だけが追求される結果、「簡単にそこで起こった出来事が否定されていく」ということを批判し、次のように語っている。

「……『集団自決』と大きな一括りにして住民の死を見るのではなくて、個々の人々がどういった心理、状況の中で死んでいったか、逆に死ななかつた人はどうしてあの中でも死なずに生き延びたのか、そういうことを個別に丁寧に見ていくことが大事だと思います。」

そもそも、提訴された大江健三郎『沖繩ノート』の中に、「……」の異様な経験をした人間（引用者注、訴訟の原告となつている元戦隊長）の個人的な資質についてなにごとかを推測しようと思わない。むしろかれ個人は、必要でない」と明言されていたことを考えても、この訴訟の不毛さは歴然としていだろう。言うまでもなく、『沖繩ノート』という書物の趣旨

は、元戦隊長個人を糾弾し、その名替を毀損することにはない。しかし、現に訴訟は起こされ、現在係争中である。また実際、明らかにこの訴訟の影響を受けて、歴史教科書の中の「集団自決」に関する記述に修正が加えられた（この修正については沖繩の県議会や市町村議会は相次いで文部科学省に対する意見書を可決し、二〇〇七年九月二十九日には大規模の県民集会も開かれた。文部科学省は、こうした動きを受け、同年二月になつて、異例の再訂正を認めた）。

沖繩戦の記憶と記録をめぐる、このような展開が見られる現在において、目取真の「水滴」という小説を読み、考えさせられることは少なくないはずだ。目取真自身、この小説を発表し芥川賞を受賞した時期に、すでに次のように発言していた。

つまり、この小説は決して共同体の物語じゃなくて、ある共同体の中で生きてきた徳正という個人の物語なんですね。だから亡霊が消えた後も、結局だれも気づいていない。徳正自身が、それを村人に語ることもないし、その後注23も一人で傷を抱えこんだまま死んでいくのかもしれない。

自らの内奥に封印されていた戦場の記憶が幽霊となつて現前化し、その幽霊に向かって罪の意識を吐露し、赦され、癒される——といった、わかりやすい物語が提示されるかに見えて、その物語の進行の最中に、いまだ幽霊という表象さえ与えられず、奥深いところに沈められていた宮城セツの存在（というよ

りむしろその不在＝忘却の穴」が、意識の中に立ちのぼる。徳正は、これを決してだれとも共有できない。ラストの場面でも、徳正が妻のウシに話してみようかと考えたのは「水を飲みに来た兵隊や石嶺のこと」であって、セツのことは早くも意識の表層から消えている。それどころか、石嶺のことでさえ、徳正は結局ウシには「話せなかった」のである。その意味で、徳正は全く癒されてなどいない。

しかし、そうであるからこそ、わかりやすい二者択一の論理に飲み込まれてしまいかねない現代において、この小説には読まれる価値がある。〈語り得ないもの〉について、ただ沈黙してしまえば、それはただ単にへなかつたこと〉にされてしまう。あつたのか、なかつたのか——こうした、わかりやすい二者択一の論理に抗して、そこに何か〈語り得ないもの〉がある、と指し示し続けることの重要性を、「水滴」というテキストは教えてくれる。これを〈否定神学〉だと嗤う者は、その嗤い声によって、何かを踏みにじっている。

〔附記〕本稿の内容は、筆者が二〇〇七年度に学習院高等科において担当した「現代文」（二年生対象）の授業内容に基づいている。

注

1 目取真俊・宮城晴美（対談）「終わらない」「集団自決」

と、「文学」の課題」（二〇〇七・二）

2 宮城晴美『母の遺したもの——沖繩・座間味島「集団自決」の新しい証言』（二〇〇〇・二二、高文研）

3 岩波書店は、正確には大江の著書の他に、家永三郎「太平洋戦争」（一九六八年刊）と中野好夫・新崎盛暉「沖繩問題二十年」（一九六五年刊）の版元としても提訴されている（その後、長らく在庫停止状態の「沖繩問題二十年」については取り下げられる）。

4 岡本厚・梅田正己（講演記録）『大江健三郎・岩波書店への訴訟』が狙うもの——沖繩戦「集団自決」と日本軍をめぐって」（二〇〇七・二、日本ジャーナリスト会議・出版部会）

5 目取真俊・池澤夏樹（対談）「絶望」から始める。「文学界」一九九七・九）において池澤は、徳正が「インテリ」として設定されている点に注意を喚起している。

6 新城郁夫は「水滴」論（『沖繩文学』という企て——葛藤する言語・身体・記憶」（二〇〇三・一〇、インパクト出版会）においてこの箇所を注目し、「亡霊との邂逅というシュールな出来事が、村の行事レベルの日常に対応させられ並列化されてしまう」と評している。

7 選評は「文藝春秋」一九九七年九月号に掲載されている。この清裕に関するプロットについて、実際に批判的な論調で言及したのは、選考委員のうち、丸谷才一、黒

井千次、田久保英夫、石原慎太郎の四名。いずれもこの部分の「寓話」性について指摘するもので、〈近代〉的な小説というジャンルにはそぐわない、といった趣旨の批判が見られる。

8 仲程昌徳「目取真俊「水滴」を読む（上）・（下）」（『琉球新報』一九九七・七・一八、二二）

9 新城「『水滴』論」（注6参照）

10 川村湊は「沖繩のゴーストバスターズ」（『風を読む 水に書く—マイノリティ文学論』二〇〇〇・五、講談社所収）において、民俗学者・仲松弥秀の所説や、沖繩の新興宗教「生命の龍泉」の教義を参照しつつ、「水滴」に見られる「水」の表象について考察している。

11 田口律男「目取真俊「水滴」論—文学・美学イデオロギーへの抵抗」（『都市テクスト論序説』二〇〇六・二、松籟社）。なお、同様の指摘は、鈴木智之「寓意的悪意—目取真俊と沖繩戦の記憶—」（『社会志林』二〇〇一・九）にも見られる。

12 田口「目取真俊「水滴」論—文学・美学イデオロギーへの抵抗」（注11参照）

13 松下博文「沖繩戦とへきれいな標準語—目取真俊「水滴」への視角—」（『語文研究』二〇〇六・六）、宮沢剛「目取真俊「水滴」論—幽霊と出会うために」（『文学年報1 文学の闇／近代の「沈黙」』二〇〇三・一一、世織書房）、中山昭彦「〈アイヌ〉と〈沖繩〉をめぐる文学

の現在—向井豊昭と目取真俊」（『岩波講座 文学13 ネイションを超えて』二〇〇三・三、岩波書店）、幸田国広「『五十年の哀れ』と向き合う—『水滴』（目取真俊）教材の試み—」（『日本文学』一九九九・二）など。

14 宮沢「目取真俊「水滴」論—幽霊と出会うために」（注13参照）

15 田口「目取真俊「水滴」論—文学・美学イデオロギーへの抵抗」（注11参照）

16 田口「目取真俊「水滴」論—文学・美学イデオロギーへの抵抗」（注11参照）

17 川村「沖繩のゴーストバスターズ」（注10参照）

18 富山一郎「増補 戦場の記憶」（二〇〇六・七、日本経済評論社）

19 鈴木「寓意的悪意—目取真俊と沖繩戦の記憶—」（注11参照）

20 新城「『水滴』論」（注6参照）

21 中山「〈アイヌ〉と〈沖繩〉をめぐる文学の現在—向井豊昭と目取真俊—」（注13参照）

22 鈴木「寓意的悪意—目取真俊と沖繩戦の記憶—」（注11参照）

23 目取真・池澤（対談）「絶望」から始める。」（注5参照）における目取真の発言。